

# 麦野A遺跡8

—麦野A遺跡第22次調査報告—



2016

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、古くから中国大陆や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されています。しかしながら、都市の発展に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、本市の重要な責務として発掘調査を行い、記録保存を行っています。

本書は、博多区麦野2丁目における個人専用住宅建設に伴う麦野A遺跡第22次発掘調査について報告するものです。本調査では、弥生時代後期の堅穴住居跡や、奈良時代のカマド付堅穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されました。また弥生時代後期の住居跡については麦野A遺跡では初めての発見で、周辺遺跡とあわせて弥生時代の集落の変遷を考える上で貴重な成果となりました。

これらの調査成果の報告により、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

## 例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成25年7月16日から同年8月16日まで発掘調査を実施した麦野A遺跡第22次調査の報告書である。なお、発掘調査費用負担は国庫補助金を適用している。
2. 発掘調査は、個人専用住宅建設工事によって遺構が影響を受ける範囲（住宅建設範囲および駐車場切り下げ部分）について行っている。そのため敷地の一部は未調査である。
3. 遺構の呼称は記号化し、堅穴建物（堅穴住居）をS C、掘立柱建物をS B、土坑をS K、溝状遺構をS D、柱穴などピット状遺構をS P、その他の遺構（不明遺構、特殊遺構、近代以降の擾乱）をS Xとした。
4. 本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは磁北である。磁北は西偏約6°、20'である。また調査地内の測量座標は敷地の形状に合わせた任意座標としたが、その任意座標の基準とした杭に、近くにあった国土交通省設置の基準点（都市再生街区基準点）から座標を移動し、国土座標上の位置を求めている。これは世界測地系である。また調査区の標高は、道路下水道局が市立小学校（本調査では板付小学校）に設置している水準点のレベルを移動して求めている。
5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄が主に行なったが、他に佐々木ランディ（当時・埋蔵文化財調査課嘱託職員）、穂國さやか（当時・福岡大学生）の助力を得た。遺物の実測は、主に土器類を山崎賀代子、（埋蔵文化財調査課技能員）が行い、久住が補足・修正した。その他、石製品類は上方高広（埋蔵文化財調査課技能員）が行なった。製図は、遺構図を小畠貴子（埋蔵文化財調査課整理作業員）、山崎賀代子、久住が行い、遺物実測図は山崎が行なった。また本書に用いる遺構写真および遺物写真は、全て久住が撮影した。
6. 表表紙写真は、麦野A遺跡第22次調査I区全景（西から）、裏表紙写真は、上段が同調査II区S C 0 1 東半（西から）、下段左がII区S C 2 1 カマド検出状況（西から）、下段右がII区S C 2 1 カマド完掘状況（北から）である。
7. 本書の編集と執筆は久住が行なった。本調査に関する遺物および記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
8. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

## 本文目次

I . はじめに	1
II . 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 検出遺構	7
3. 出土遺物	16
III . 調査のまとめ	16
P L . 1 ~ 4	17 ~ 20

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区麦野2丁目17番20における、個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年6月7日付で受理した（事前審査番号25-2-267）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡（分布地図番号25-0048）に含まれており、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成25年6月25日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下35cm～60cm前後で奈良時代前後とみられる遺構と遺物が確認されたことから、遺構（埋蔵文化財）の保全等に関して事業者と協議を行った。

その結果、工事計画は住宅基礎工事や駐車場切下げ造成工事において、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、住宅建設および駐車場造成に伴う工事範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成25年7月12日付で建築主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務に関する事前協議確認書を締結し、同年7月16日から発掘調査を実施することになった。なお調査費用については、当該工事が個人建築による専用住宅建設であるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、国庫補助金を適用することになった。

本調査は予定通り平成25年7月16日に開始し、同年8月16日に終了した。資料整理および報告書作成は、平成27年度に資料整理を行い、平成28年3月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は当頁下段の表のとおりである。

### 2. 調査の組織

調査主体： 福岡市教育委員会

調査委託： 個人

（発掘調査 平成25年度）

調査総括： 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗  
同課調査第1係長 常松幹雄

調査庶務： 埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子

事前審査： 埋蔵文化財審査課事前審査係 森本幹彦

調査担当： 埋蔵文化財調査課調査第1係 久住猛雄

（資料整理・報告書作成 平成27年度）

整理・報告総括： 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄  
同課調査第2係長 榎本義嗣

整理・報告庶務： 埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子

整理・報告担当： 埋蔵文化財調査課調査第2係 久住猛雄

### <調査基本情報>

遺跡名	麦野A遺跡	調査次数	22次	調査略号	MGA-22
調査番号	1318	分布地図図幅名	025 井尻	遺跡登録番号	0048
申請面積	145m <sup>2</sup>	調査対象面積	100m <sup>2</sup>	調査面積	110m <sup>2</sup>
調査期間	平成25(2013)年7月16日～8月16日	事前審査番号	25-2-267		
所在地	福岡市博多区麦野2丁目17番20				

### 3. 麦野A遺跡の地理的歴史的環境と周辺の調査

麦野A遺跡は、福岡平野の中央、御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する遺跡である。この段丘は花崗岩風化礫層を基盤とし、Aso-4起源の火碎流ないし須玖火山灰の堆積による、下層の八女粘土層および上層の鳥柄ローム層と呼ばれる堆積物からなる洪積台地である。今回の調査では、表土直下で鳥柄ローム上面となり、これを遺構検出面とした。麦野A遺跡の他の地点も、多くは台地上であるため削平や表層土の流失、段造成など地形の改変が多く、遺構検出面は比較的浅い深度で検出される鳥柄ローム上面となることが多い。これは、麦野A遺跡から同じ段丘の南

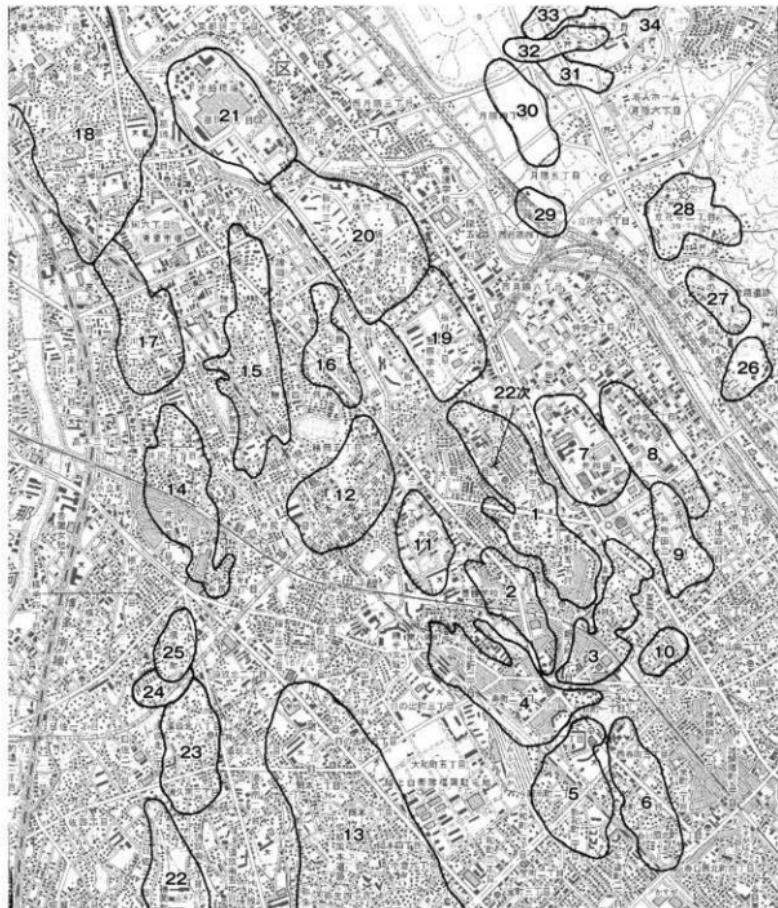


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

\*上記の遺跡（周辺の埋蔵文化財包蔵地）の範囲はおよその範囲であり、調査の進展により変動している。

また上記分布図の範囲中に記入していない包蔵地もある。より正確で最新の情報は埋蔵文化財窓口にて照会されたい。

(Fig. 1 記入遺跡名) 1. 麦野A遺跡、2. 麦野B遺跡、3. 麦野C遺跡、4. 南八幡遺跡、5. 雜餉隈遺跡、6. 中ノ原遺跡(春日市を含む)、7. 井相田C遺跡、8. 仲島遺跡(大野城市を含む)、9. 井相田A遺跡、10. 井相田B遺跡、11. 三筑遺跡、12. 笹原遺跡、13. 須玖岡本遺跡群(春日市)、14. 井尻B遺跡、15. 諸岡A遺跡、16. 諸岡B遺跡、17. 五十川遺跡、18. 那珂遺跡群、19. 高畠遺跡、20. 板付遺跡、21. 那珂君体(那珂久平)遺跡、22. 弥永原(日佐原)遺跡(春日市を含む)、23. 御陵遺跡(春日市)、24. 笠抜遺跡、25. 寺島遺跡、26. 影ヶ浦遺跡、27. 金隈遺跡、28. 立花寺遺跡、29. 立花寺B遺跡、30. 下月隈C遺跡、31. 上月隈遺跡、32. 下月隈B遺跡、33. 下月隈天神森遺跡、34. 下月隈A遺跡

跡と板付遺跡は、現状では削平が進み分かりにくいが、本来は遺跡範囲内に古い流路(小河川)や人工的水路があり、水田が營まれたような低い部分や板付の弥生時代初期の環濠集落が營まれた周辺のような本来高い場所もあるので、遺跡範囲がほぼ段丘上にある上記の遺跡群(Fig. 1-1~6)とは遺跡の微地形がやや異なり、起伏がよりあったと考えられる。高畠遺跡と板付遺跡では奈良時代前期に造営された古代官道(山陽道、水城東門ルート)の痕跡(切通しや道路側溝など)が検出され、北側の那珂君体遺跡では未確認だが、南西側の井相田C・A遺跡や麦野A遺跡ではその延長が確認されている。麦野A遺跡の南側に連なる前述の遺跡群は、段丘が侵食による狭い谷部の開折によるハツ手状になった舌状の段丘の支丘が複数あり、その支丘ごとに存在する遺跡を便宜的に分けて遺跡の単位としている。本遺跡も、南端部の狭い尾根状の鞍部があるが、その南側の麦野C遺跡と連続した一連の段丘を形成している。また麦野Aの東側にある井相田・仲島遺跡群(Fig. 1-7~10他)は、御笠川中流域左岸の沖積微耕地に各遺跡が展開する。弥生時代早期・前期があるが、その後は中期以降古墳前期までが少ない。しかし、古墳時代中期～後期、飛鳥時代の遺構が継続的に展開するのは福岡平野では少なく特記され、方形区画群がある井相田Cの一部は、「首長居館」などを含む可能性がある。また遺跡群は古代から中世初期まで官道沿いに一部官衙の可能性がある集落遺構が展開する。

麦野A遺跡が立地する略南北方向に延びる段丘(台地)は、南北約1.2km、東西約0.4kmであり、現況の地表面標高は約12～16.5mである。現代の宅地造成により今は分かりにくいが、戦前の地形図などによれば、北側から開折する狭い谷が數本認められ、かつては水田になっている。また台地の中央西側に標高16m前後の緩いピークがあり、北西側に支丘が派生している。台地南側では、2箇所の緩い鞍部が認められ、南端部では狭いがより明瞭な鞍部となり、麦野C遺跡との間を画している。本報告の第22次調査は、今まで調査が比較的少なかった遺跡の北半部西側に位置する。敷地の標高は14.5～14.8mで、西側が高く段丘尾根となっている。南側前面道路は東に下がっており、敷地東側では道路面とは1m近い高低差があるが、調査区の遺構の遺存状況からすると、南側道路斜面は後に切通しされたものであろう。したがって現状地形での旧地形推定には注意が必要である。

麦野A遺跡では、これまで24次(平成26年度末現在)にわたる発掘調査が実施され、縄文時代と推定される陥し穴状遺構も検出されているが、弥生時代から中世の遺構が主体を占めている。主たる時期は奈良時代を前後する古代(飛鳥時代末～平安時代初期)であり、堅穴建物(堅穴住居が主だが全てが「住居」とは限らないので「建物」とする)を主要遺構として構成される集落遺構が展開するが、7次調査では横列・門・推定方形になる区画溝で構成される奈良時代の官衙遺構が検出されている。弥生時代は、遺跡中央部東側の18・20次などで前期の堅穴建物や貯蔵穴が検出され、段丘の東斜面側に貯蔵穴、その西側の段丘尾根上に堅穴住居群を配置する集落景観が想定される。前期の遺構群は、より東側の沖積微高地に展開する仲島・井相田遺跡群の同時期の遺構群と一連のグループだろう。

側に連なる遺跡群(Fig. 1-2～6)も同様の状況にある。これら、麦野A・B・C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡はいずれも飛鳥時代末から平安時代初期(7世紀末～9世紀前半)までの遺構群が特に多く分布することも共通している。麦野A遺跡の北側には、浅く狭い沖積層の鞍部(谷部)を挟み、高畠遺跡、そして板付遺跡が連なっている。高畠遺



Fig. 2 麦野A道路 22 次調査の位置と周辺 (1/750) 0 30m

しかし中期以降は遺構がほとんどない。遺跡北端の13次では土坑から中期後半の広口壺の破片や、後期中頃の鉢（報告では「古墳時代」とするが器形は弥生後期土器）が出土するが、位置的に北側の高畠遺跡群の展開と関連しよう。ただし、本報告の22次で中期後半頃の甕形土器片や、後期中頃の竪穴建物が検出されたので、調査の少ない遺跡北半部には、弥生時代中期から後期の遺構が散漫に分布している可能性はある。その後、古墳時代はほとんど無く（上記のように13次は弥生後期、また19次の「古墳時代」竪穴建物は飛鳥時代末である）、飛鳥時代（九州須恵器編年IV期～VI期）の末期（VI期）から遺構が再び現れ、奈良時代前期から平安時代初期（8世紀前半～9世紀初頭）に遺構が増大する。2・3・5・6・8・14・18・20・23次などで多くにカマドを有する竪穴建物、あるいは掘立柱建物、井戸、土坑が検出されている。これらの分布の中心付近に7次の官衙遺構がある。また4・6次では平安時代前期（9～10世紀）の井戸や土坑があり、4次では縁軸陶器や繩目叩き文瓦が出土し、一般集落より上位の様相である。中世前半（12～14世紀前半）は少ないが、23・24次に遺構が若干見られる。その後、中世後半になり遺構が再び増大し、6・9・18・20次では同一の方形居館とみられる大規模な堀が検出されていて、24次ではその内部の区画溝や園池の可能性がある落ち込みが検出されている。1・16次でも中世後半の井戸や掘立柱建物群が多く検出されている。

その他、麦野A遺跡から連続的に立地し、奈良時代前後に一連の大きな集落域となる麦野B・C、南八幡、難削隈、中ノ原からなる遺跡群の当該期の様相は、「南八幡遺跡群第8次調査」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第602集）、「中南部（8）」（同第867集）に詳しく、最新成果を含むまとめは「中ノ原遺跡」（同第1195集）にある。また、これら遺跡群の弥生時代遺構の展開については、「南八幡遺跡9」（同第1171集）に詳しく述べられているので参照願いたい。

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

本報告の麦野A 22次調査は、遺跡が立地する段丘のはば中央部のうちやや北側の高所に位置している。調査地は、略南北に延びる段丘尾根頂部（現在はこの上を直線的に道路が走る）から僅かに東に下る地点にある。調査区の周囲標高は、西側で14.70 m、東側道路面で13.4 m（調査対象敷地東側は道路より一段高い）、調査区敷地はほぼ平坦である。盛土により逆に東側が僅かに高くなるが、遺構の遺存状況からは、調査区内においては南側前面道路の斜面ほどには傾斜していなかったと見られる。

発掘調査では、地表下の最も浅い西側で-20～30cm、東側で-45～60cm前後で鳥栖ローム上面となり、遺構を検出した。調査は敷地内での廃土処理の都合から、二区に分けている。

I区（調査区西半）は、南側が道路までの駐車場切り下げがあり南北にやや長い。竪穴建物SC01と柱穴若干を検出した。柱穴のうち3つは掘立柱建物を構成することが判明し、西側隣地の確認（試掘）調査により、柱列の延長を検出している。東西4間以上×南北1間以上であり、古代であろう。他にやや大きめの柱

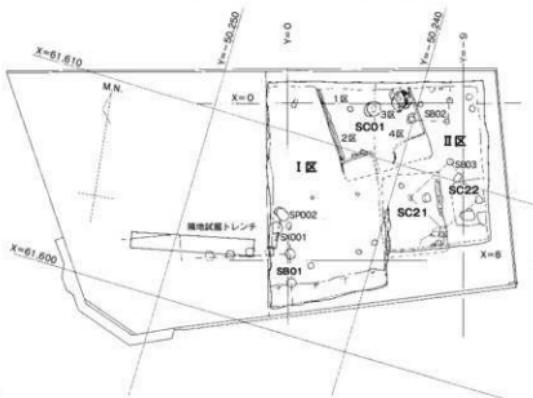


Fig. 3 調査区概要図と国土座標 (1/250)

穴があり、須玖II式前後の壺破片を出土した。SC01は、反転後の調査区東半（II区）に続く。搅乱が一部におよぶが、深さ50cm近い残り部分もあり、比較的遺存が良い。東西4.7m、南北推定6.4m前後の長方形プランである。中央に土坑状の炉址があり、下層覆土に焼土粒とわずかな炭粒を含んでいた。搅乱で残りが悪いが、南北の二隅に厚い貼床によるベッド状遺構がある。主柱穴が明確ではない。東半に土坑状落ち込みがあるが、対称位置に柱穴がなく、屋内土坑であろう。炉址、屋内土坑、ベッドの存在から住居でよいだろう。弥生時代後期前葉～中葉の土器片が多く出土し、また肌理の細かい研石が出土している。

II区（調査区東半）は、SC01東半分のほか、東西3.2m×南北推定4.0mの長方形堅穴建物SC21や、南北2.3～2.4mの小型正方形堅穴SC22、柱穴若干を検出した。SC21は、出土土器は奈良時代前半である。カマドが南東側にあり、隅角の可能性が高い。袖部は灰白色の粘土で構築され、その間に燃焼室があり床面がよく焼けていた。貼床はあるが薄い。東西辺に壁周溝がある。カマドの使用が明らかで住居であろう。SC22は、カマドは不明だが、明確な貼床がある。一部、台状に高い床部があり、作業小屋であろうか。複数のピットが重複する。遺物が不明確だが、古代であろう。その他、柱穴（ピット）には、古代～中世までがあると思われる。

なお今回の調査期間中は、例年ない猛暑であり、作業効率が低下し、調査工程に影響するほどであった。予定の調査期間ギリギリで調査を終了している。また調査地内に水道がなかったため、猛暑でもあり撒き水や手洗い水など苦慮するところであったが、近くの公民館よりもらい水を受けることになり何とか凌げることになった。関係者の方に感謝申し上げるところである。

#### ・調査区の基本土層について

調査区壁面土層はFig.5に記した通りだが（各土層の位置はFig.4）、簡潔に記すと、いずれも現在の地表面下にはごく近年の何層かの盛土があり、その下部にこれも近年の畠耕作土であろう旧表土層が

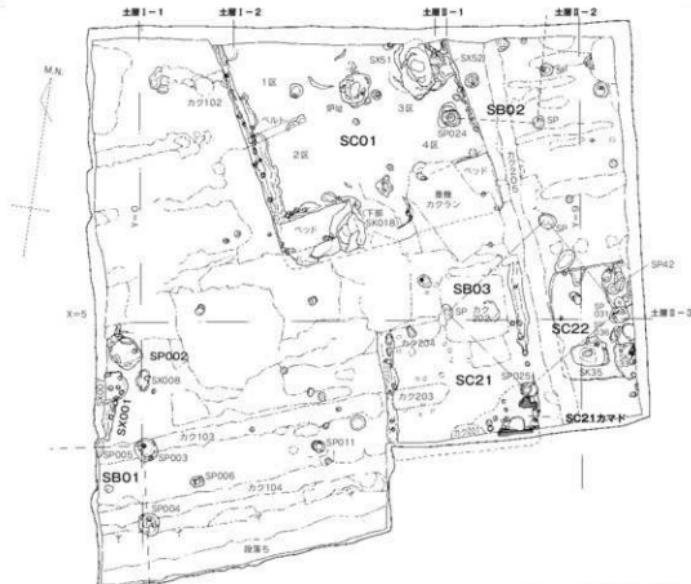


Fig. 4 調査区全体図 (1/100)

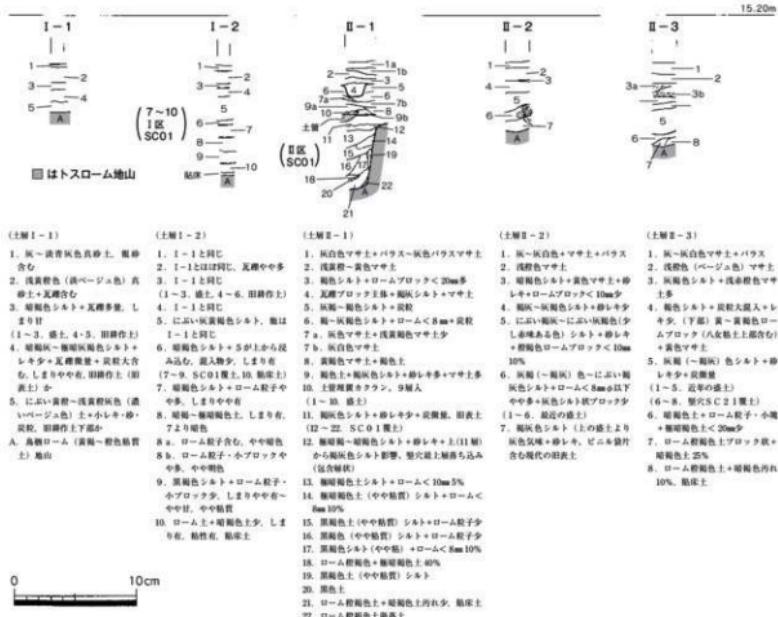


Fig. 5 調査区壁面土層図 (1/40)

あり、その下部は一次的な包含層などを挟まずに鳥居ローム上面となる(Ph. 1)。この上面で遺構を検出したが、当然に遺構の時期の地表層は削平を受けていることになる。

## 2. 検出遺構

### (1) 壺穴建物 (壺穴住居: SC)

#### ・SC01 (Fig. 6, PL. 1-2~5, PL. 2, PL. 3-1~3)

壺穴建物SC01は、I区とII区にまたがり検出されたが、反転調査区境界部分で、わずかに調査できなかった部分がある。遺構の覆土は極暗褐色～黒褐色土で明瞭であった(PL.1-2)。「壺穴建物」とするが、規模も十分で、炉址があり、貼床があり、隅にベッド状遺構があり、廃絶時に壊れた土器破片を廃棄し、生活痕跡があり「壺穴住居」としてよい。壺穴住居の規模とプランは、北側が調査区外だが、南北5.2 m以上×東西4.6 mである。炉址を中心として反転すると長軸は約6.6 mの長方形住居となる。方位は長軸がN(磁北)-30°-Wである。床面は全体的に貼床があり(中央は薄い)、後述するが四周の貼床は厚い。壁際西辺は壁周溝(+小ピット?)があり、東辺は小ピット列がある。ベッド状遺構が南西隅と南東隅にあるが、いずれも盛土(貼床)による構築である(断面図およびPL. 2-5~7参照)。他の床面より15cm前後高い。おそらく北側両隅にもあるだろう。壺穴掘り方は凹凸があるが、中央を除くほぼ四周が周溝状となるタイプである(PL. 2-2, 4, PL. 3-4)。「ベッド」は、一部擾乱で不明な部



Ph. 1 調査区壁面土層図 (1/40)

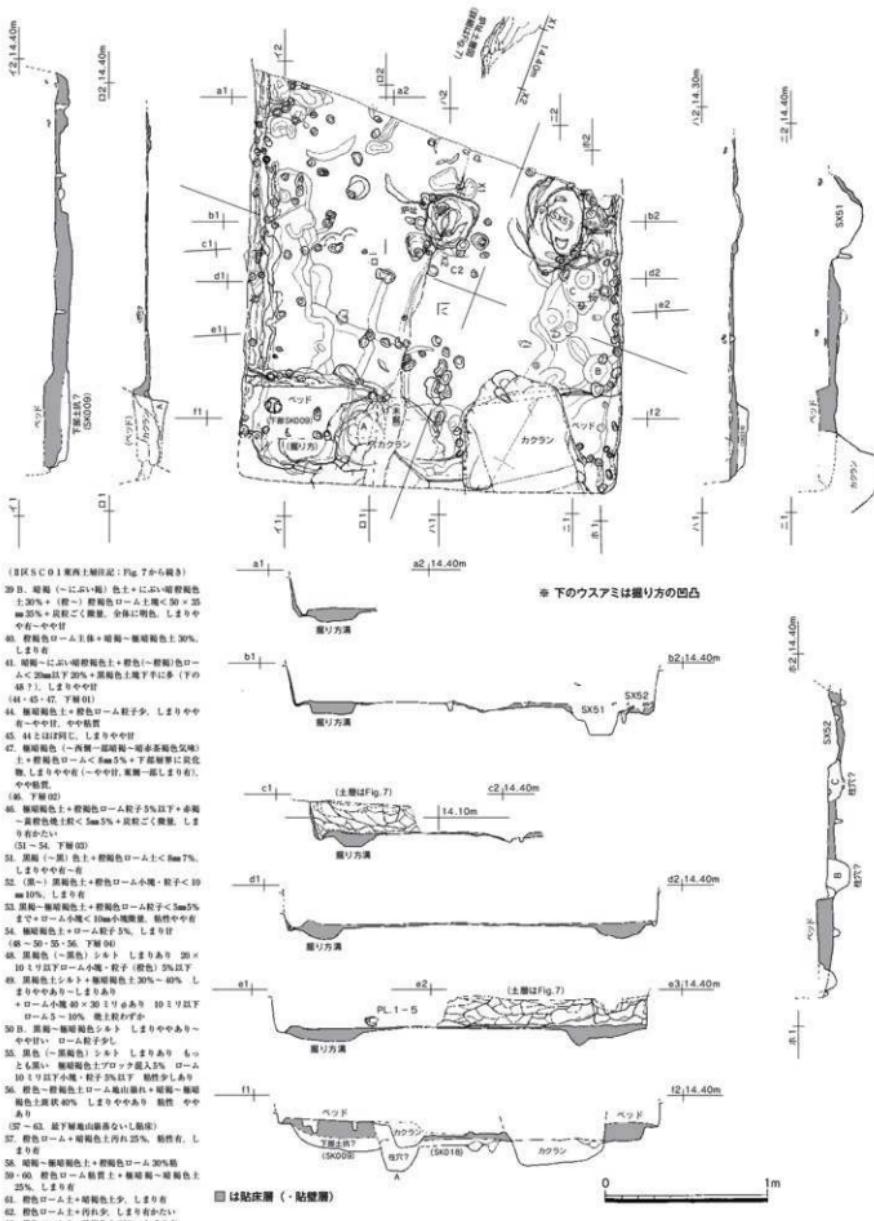


Fig. 6 SC01 実測図 (1/60)

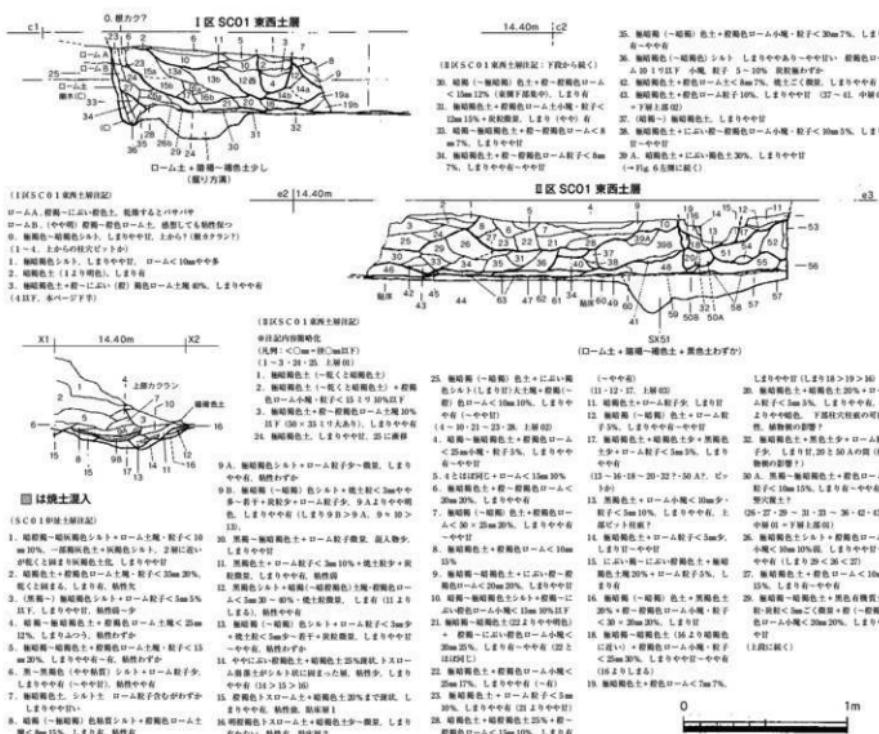


Fig. 7 SC01 主要図 (1/30)

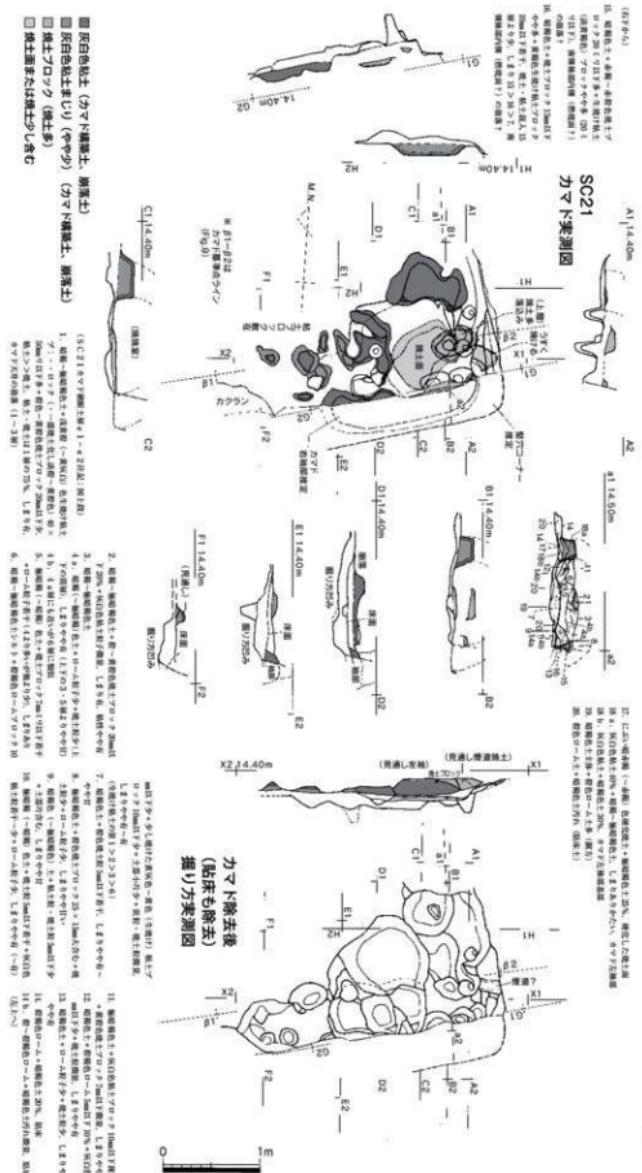


Fig. 8 SC21 カマド寒測図 (1/25)

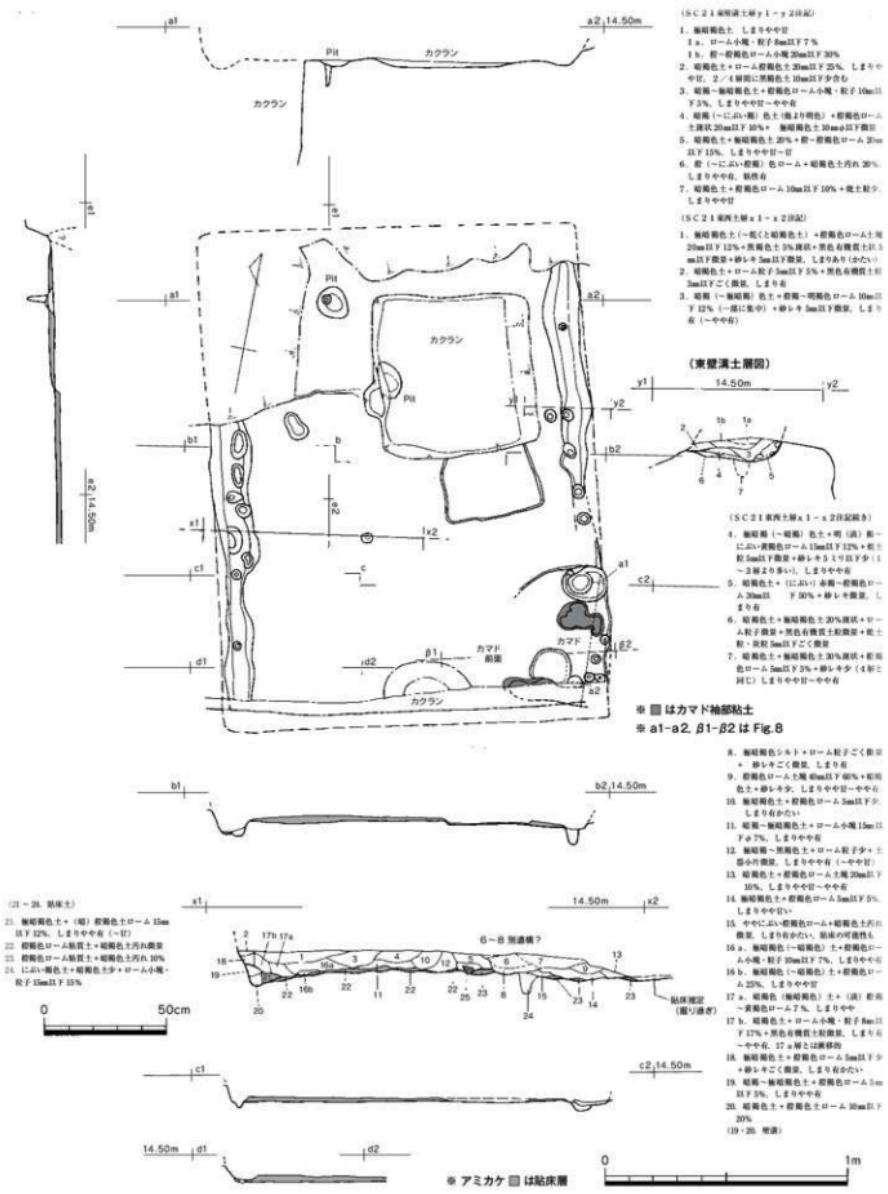


Fig. 9 SC21 実測図 (1/40, 土層図は 1/20)

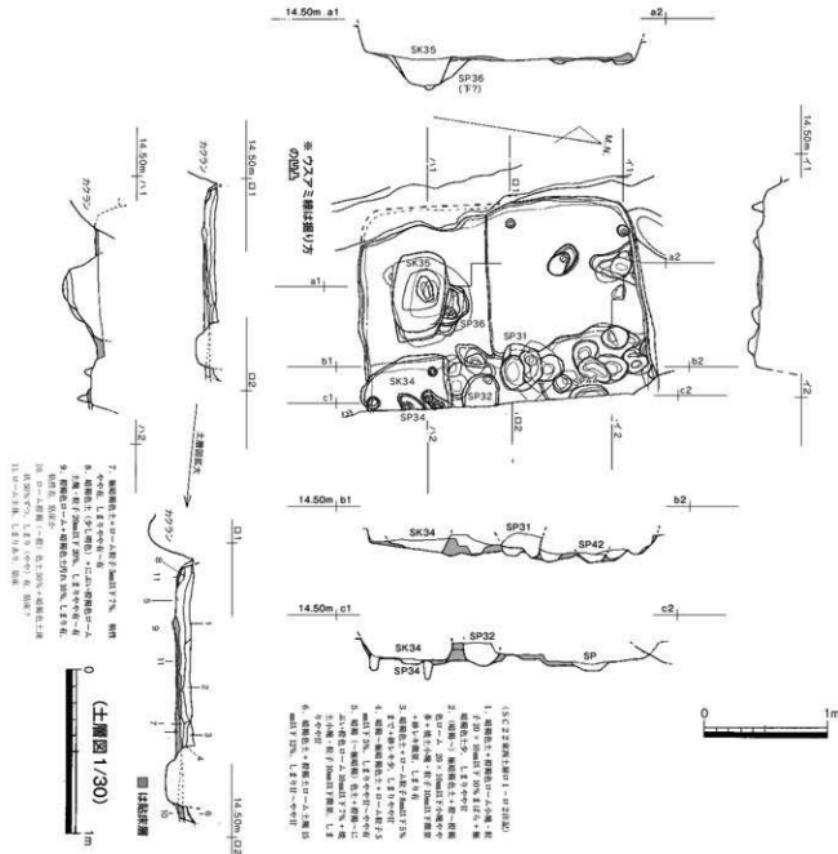


Fig.10 SC22 実測図 (1/40, 土層図は 1/30)

穴建物の成立過程での試行錯誤段階の一様態であろう。

堅穴住居の横断土層 (Fig. 7、PL. 1 – 3, PL. 3 – 2) は一見レンズ状の堆積大別に見えるが、その中に地山ブロックを多く含む小層単位が多数あり、その傾きも一定ではない。つまりこの住居は廃絶時にある程度埋め戻されたと観察される。したがって、厳密な床直ではないやや浮いた出土位置の遺物も、少なくとも「下層」出土までは廃絶時一括としてよい。実際に、出土土器に若干の「型式」幅はあるが、同一「様式」幅としてよい (Fig.12)。なお床面に近い最下層から弥生時代後期中頃の甕下半部が出土したが (PL. 1 – 5) これが最も遺存度が良く、他は土器破片のみである。

#### ・SC21 (Fig. 9, PL. 3 – 5. カマドは Fig. 8, PL. 3 – 6.7, PL. 4 – 2.3)

II区で検出した極暗褐～暗褐色覆土の堅穴建物。北西部から北側を搅乱により削られ、中央北東側にも搅乱があり、また南辺は調査区外である。検出できたのは東西 3.1 ~ 32 m × 南北 3.9 m 以上とな

るが、カマドは南東隅と考えられ、南北4.1 mだろう。N - 14° - Wの長方形となる。深さは10 ~ 15cmの遺存だが、より古いSC01に比べて浅いのは、元から比較的浅い堅穴だろう。カマドの存在と規模から「住居」と認定する。南北辺は不明だが、東西辺に壁周溝がある。床面は北側が少し低い。貼床はあるが全体にSC01より薄く、掘り方に凹凸があまりない。ただしカマド付近のみは掘り方の凹凸が顕著で貼床が厚かった(Fig.8下段, PL. 4 - 3)。なお主柱(穴)は存在せず、壁立ち構造の可能性がある。

カマド(Fig.8、カラー写真は裏表紙)

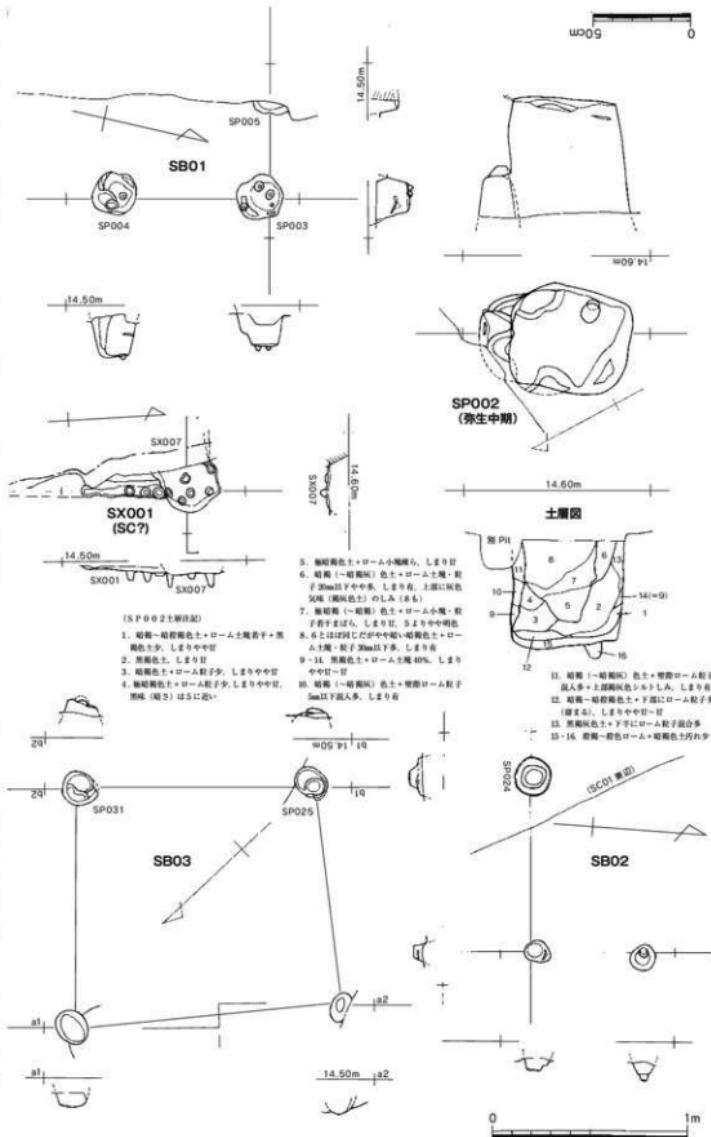


Fig.11 掘立柱建物(SB)・不明遺構(SX)・柱穴(SP)実測図(1/50,SP002は1/25)

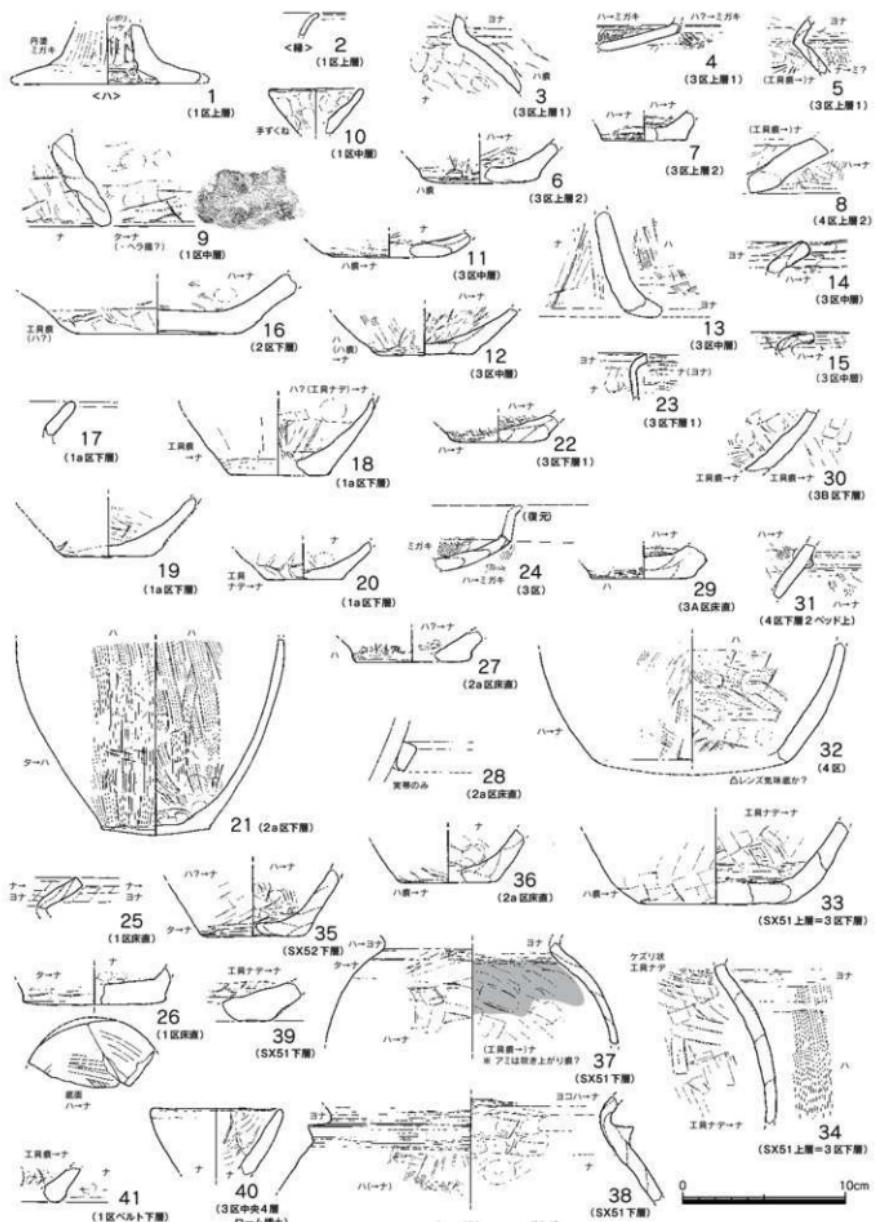


Fig.12 SC01 出土土器実測図 (1/3)

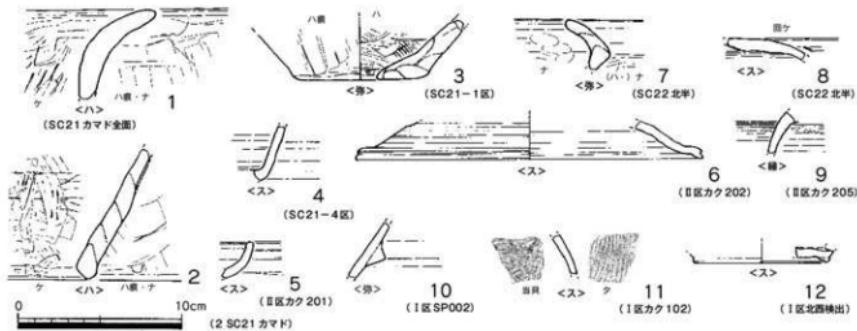


Fig.13 SC21, SC22, その他遺構出土土器実測図 (1/3)

段)は堅穴南東部にあり、東向き煙道という特異な形式。もしカマドが壁中央ならば、堅穴の平面形が細長くなり過ぎる。カマドの認識は容易で、中央を空けて推定両袖の粘土ブロック(右袖は調査区壁に僅か)が分かり、その間の堅穴壁際にカマド天井部崩落と推定できる焼土塊が認められた(PL. 3 - 6.7、裏表紙下段左)。掘り進むと、灰白色粘土主体の袖部が分かり、また燃焼室中央床面に焼土面があり(裏表紙下段右)、東側の堅穴壁がカマド部では傾斜が緩く、その面が僅かに焼けており煙道痕跡であろう(Fig. 8上段)。カマド前面には、住居廃絶時にカマドを壊したと思われる粘土ブロックが床面に散在する(PL. 3 - 7, PL. 4 - 2)。この中に土器片を廃棄しているが意図的だろう。出土遺物は少ないが、土師器壺・瓶の破片(Fig.13 - 1.2)、須恵器坏身(Fig.13 - 4)があり、SC 2 1を切る搅乱出土の須恵器(Fig.13 - 5.6)も本来伴うだろう。須恵器坏身と坏蓋(Fig.13 - 4.6)から、牛頭窯跡群編年(註1)のⅧA期古相、8世紀第1四半期であろう。(註1)舟山良一-2008「V.出土遺物の検討 1. 須恵器の編年」『牛頭窯跡群-総括報告書1-』大野城市文化財調査報告書第77集、大野市教育委員会

#### ・SC22 (Fig.10, PL. 4 - 4.5)

II区南東で検出した小堅穴。東側は調査区外。南北 2.2 ~ 2.4 m × 東西 1.7 m 以上。方位は N - 16° - W で S C 2 1 に近い。カマド不明、壁溝はないが、貼床が一部にある。南東部が台状にわずかに一段高いが(数cm)、堅穴東側が新しい遺構の重複と掘り方の凹凸が重なり不明瞭な部分がある。おそらく「堅穴建物」としてよいだろうが、主柱(穴)は不明。S P 3 1・3 2 は新しい。S K 3 5 は堅穴を切ると考えたが、あるいは主柱の抜跡の可能性もある。覆土は暗褐色～極暗褐色土で S C 2 1 と同じかやや淡い(明るい傾向)。したがって方位の同一性から同時期とみてもよいが、やや躊躇するところもある。同時期とすれば、「住居」ではない、「作業小屋」や「納屋」のような性格か。出土遺物にやや長い研石がある(Fig.14 - 3)。また僅かな須恵器片(坏蓋)は S C 2 1 と同時期でもよい(Fig.13 - 8)。

#### (2) 挖立柱建物 (S B)

掘立柱建物は3棟推定した。S B 0 1 (Fig.11左上, PL. 4 - 6)は、調査区外西側隣地に延びる(Fig. 3, Ph. 2)。東西4間(4.1m)以上×南北1間(1.5m)以上、方位N - 77 ~ 79° - E。調査区内3柱穴の深さはSP004が40cm、SP003が35cm、SP005が20で推定梁間の2柱穴がやや深い。いずれの覆土も暗褐色～極暗褐色で古代でよい。方位も S C 2 1・2 2 に近い。S B 0 2 (Fig.11右下)は、SP024がS C 0 1 を切る。東辺の柱間が狭いのは隅角の東柱だろう。おそらく北側に展開する。1 × 1 (1.8 m × 1.1 m)間以上、N - 86° - W。S C 0 1 覆土を切る柱穴がまだあった可能性もあるが不明。古代～中世。S B 0 3 (Fig.11左下)は、1 × 1 間(2.4 ~ 2.7 m × 2.3 ~ 2.4 m)の歪んだ建物。方位N - 38 ~ 43° - E。S C 2 1・2 2 を切る。

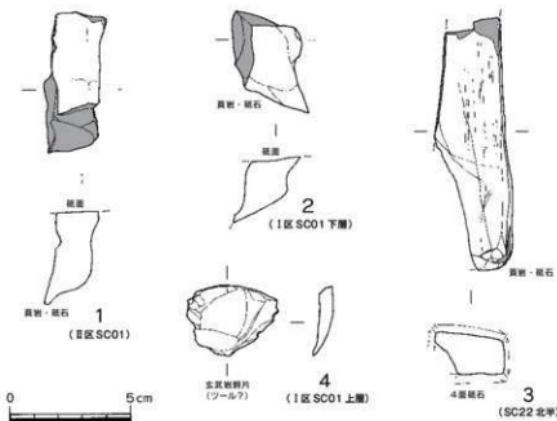


Fig.14 麦野A22次出土石製品実測図 (1/2)

### (3) 弥生時代の柱穴

**SP002 (Fig.11 右中段)**は、埋土が黒褐色～極暗褐色主体の55×60cmの方形柱穴。長軸N=33°-E。北東側は新しいピットに切られる。覆土がSC01と同じ。土層は柱を抜いた痕跡の可能性。ただし対応する他の柱穴は調査区内に無く建物としては不明。出土遺物(Fig.13-10)は弥生時代中期後半前後の壺の下部と見られる。SC01に先行する集落遺構が存在した可能性を示す。

### (4) 不明遺構 (SX)

**SX001とSX007 (Fig.15 左中段)**は重複にも見えるが、おそらく一連のもの。SX001は竪穴建物の壁周溝とピット列で、SX007は竪穴の掘り方の凹みか。竪穴の壁が削平されたものだろう。東辺1.4m以上、N=4°-E。

### 3. 出土遺物 (Fig.12~14)

紙幅がないので簡単に説明する。図中(Fig.12・13)に、遺物の種類や調整についての説明を入れており、その凡例は以下の通り。  
 <ハ>=土器類、<弥>=弥生土器(ただしFig.12の弥生土器は特に注記せず)、<ス>=須恵器、<緑>=緑釉陶器、(調整)「ケ」=ヘラケズリ、「ナ」=ナデ、「タ」=タタキ、「ハ」=ハケメ(木目条痕)、「ヨナ」=ヨコナデ、「ミ」(ミガキ)=ヘラミガキ、「痕」=痕跡、「ヨコハ」=ヨコハケ、「回ケ」=回転ヘラケズリ

**SC01出土土器 (Fig.12)**は、ほぼ弥生時代後期中頃の土器。壺・壺類の底部は平底から凸レンズ底まである過渡期で、後期中頃でも後期前葉に近い様相を残す。4・24は壺部上半を欠くが瀬戸内系高杯在地化直後の型式。9・13は器台。23は弥生前期後半の壺。1は飛鳥時代後半の土師器高杯か。2は緑釉陶器で混入。SC21に伴う土器(Fig.13-1,2,4~7)は説明した。弥生後期土器(Fig.13-3,7)は本来SC01の帰属だろう。緑釉陶器がもう1点あり(Fig.13-9)、SC01上層の1点とともに9世紀の須恵器壺身(Fig.13-12)と関連するか。石製品(Fig.14)は、SC01もSC21も砥石主体だが、4の玄武岩剥片ツール(?)は弥生前期だろう。

帰属だろう。緑釉陶器がもう1点あり(Fig.13-9)、SC01上層の1点とともに9世紀の須恵器壺身(Fig.13-12)と関連するか。石製品(Fig.14)は、SC01もSC21も砥石主体だが、4の玄武岩剥片ツール(?)は弥生前期だろう。

### III. 調査のまとめ

本調査では、周囲に多い奈良時代前後の集落遺構とともに、これまで分布のなかった弥生時代中期後半と後期中頃の集落遺構が認められた。今後、遺跡北半でこの時期前後の遺構の検出が予測される。



1. I区全景（東から）



2. I区 SC01 上面検出状況（東から）



3. I区 SC01 ベルト土層（南から）



4. I区 SC01 床面検出状況（西から）



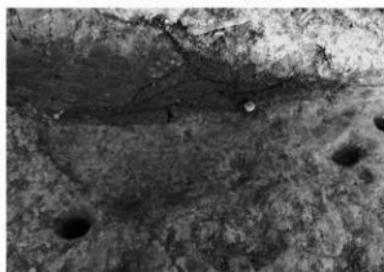
5. I区 SC01 中央下層土器出土状況(西から)



1. I区 SC01 床面検出状況（南から）



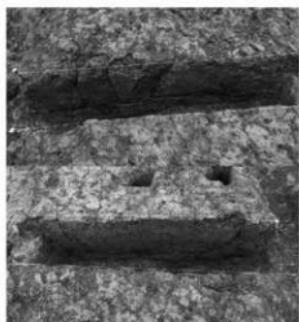
2. I区 SC01 挖方完掘状況（南から）



3. I区 SC01 炉址検出状況（西から）



4. I区 SC01 挖方完掘状況（東から）



5・6. I区 SC01 南ベッド部トレンチ土層  
(東から／西から)



7. II区 SC01 検出時南ベッド部土層断面（南西から）



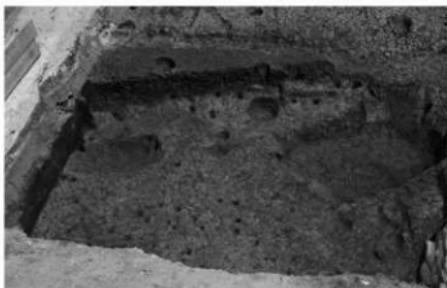
1. II区 SC01 床面検出状況（北から）



2. II区 SC01 ベルト土層（南から）



3. II区 SC01 北東床面 SK051（西から）



4. II区 SC01 掘方完掘検出状況（西から）



6. SC21 カマド上面検出状況（西から）



5. II区 SC21 床面検出状況（南から）

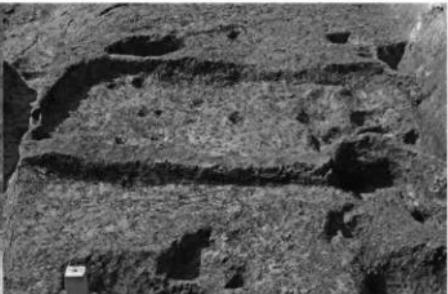
7. SC21 カマド横断土層状況（西から）



1. II区全景（西から）



2. SC21 カマド掘削途中（南から）



4. SC22 東西土層（南から）



3. SC21 カマド下部掘削・  
左袖部横断面（西から）



5. SC22 掘方完掘状況（北から）

6. I区 SB01（東から）

## 報告書抄録

ふりがな	むぎのえーいせき8 —むぎのえーいせきだい22じちょうさはうこく—
書名	麦野A遺跡8
副書名	—麦野A遺跡第22次調査報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1298
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦 2016年3月25日

遺跡名ふりがな	むぎのえーいせきだい22じちょうさ
遺跡名	麦野A遺跡第22次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくむぎの2ちょうめ17ばん20
遺跡所在地	福岡市博多区麦野2丁目17番20
市町村コード	40130
遺跡番号	0048
北緯	北緯33度33分15.5秒(世界測地系)
東経	東経130度27分32.1秒(世界測地系)
調査期間	2014.7.16 ~ 2014.8.16
調査面積(m <sup>2</sup> )	110.05m <sup>2</sup>
調査原因	個人住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代	堅穴住居（堅穴建物）3棟、掘立柱建物3棟、堅穴状遺構1、土坑3、柱穴	弥生土器（前期・中期・後期）、土師器（飛鳥時代、奈良～平安時代）、須恵器（奈良～平安時代）、縁軸陶器、石製品（砾石）、剥片石器（弥生時代？）	これまでの麦野A遺跡の調査では、古代から中世の遺構・遺物の検出が主体であった。弥生時代は前期中頃～中期初頭の貯蔵穴等が若干検出されているが、弥生時代中期前葉から後期の遺構の検出は無かった。しかし今回、弥生時代中期後半頃の柱穴と、後期前葉～中頃の堅穴住居が検出されたことから、調査事例の少ない遺跡範囲の北側に、当該期の小規模な集落が分布している可能性が生じることになった。弥生時代後期の堅穴住居SC01は、床面中央に井戸、東辺中央に屋内土坑を有する。北側は不明だが南西と南東の二隅には「ベッド状」遺構がある。堅穴住居の埋設過程は、上層から外縁部の黒色土堆積以外は意図的埋め戻しが考えられる。住居廃棄後に放置されたものでないとすれば、周間に直後の住居が存在するだろう。また主柱穴不明のSC01は、ベッド付長方形2本主柱堅穴住居の確立過程での過渡的の住居型式であろう。

## 麦野A遺跡8

—麦野A遺跡第22次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1298集

2016年3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 石橋印刷株式会社  
福岡市博多区東比志3丁目21-10

